

## ハイナー・ヘッセ氏との対話

(2000年7月15日)

小澤 幸夫

ハイナー・ヘッセ氏に初めてお目にかかったのは今から19年も前のことになる。ヘルマン・ヘッセ研究会・友の会初代会長故井手貴夫（あやお）先生の紹介によるものだった（「研究会」はヘッセ研究者の集まりで『書簡集』の翻訳などを行っている。「友の会」はこれをさらに拡大し、一般読者や愛好者などを含む）。その後国際ヘルマン・ヘッセ・コロキウムで何度かお会いし、5年前にお目にかかった際は、ヘッセが後半生を過ごしたモンタニョーラに開館したばかりのヘッセ記念館（Museo Hermann Hesse Montagnola）を自ら案内して下さった。

ヘッセ氏は1909年生まれ、90歳を過ぎ家から出ることが少なくなってきたが、ヘッセの三人の息子のうち生きている唯一の息子としていまなお御健在である。（三男のマルティン氏は疾うに亡くなり、長男のブルーノ氏も残念ながら1999年に亡くなられた。）

今回はスイスのロカルノ郊外にあるヘッセ氏のお宅にお邪魔した。近くのバス停まで出迎えて下さったヘッセ氏に御礼申し上げ、天候の話などをすると、最近の良い天気でも悪い天気でもどうでもよくなったとおっしゃっていた。マッジョーレ湖を眺める道を愛犬のウナといっしょにしばらく行きお宅に着いた。19年前にもお邪魔した、山小屋風の造りで庭に水車のある美しい家である。

ヘッセ氏は椅子に座って、「甘いよ」と言いながらペット・ボトルのままジュースを差し出し、筆者の顔を見て「万年学生か」と言って楽しそうに笑った。手紙やファックスではともかく、電話でもヘッセ氏が筆者のことを“Herr Professor”（先生、教授）と呼ぶので、「あなたにとっては私は相変わらずの万年学生です」と言ったからだ。以前勤務していた大学を辞め、ウィーン大学の学生として勉強

していた時分、国際ヘルマン・ヘッセ・コロキウムでお会いした際その旨を告げると、「何をして生活しているのだね。万年学生も困ったものだ」と苦笑いされたのを踏まえているのである。

話はまず（筆者がヘッセと並んで研究している）シュニッツラーとの関係から始まった。シュニッツラーの日記には何箇所かヘッセについて言及している箇所がある。1908年9月21日には『ペーター・カーメンツィント』を、1919年7月29日には『デーミアン』を、1920年6月27日には『クリングゾア最後の夏』を、1927年8月11日と31日には『荒野の狼』を読んだという記述が見られる。また1924年8月29日にはヘッセが住んでいたルガーノで出版社のフィッシャーらとヘッセ夫妻に会っている。興味深いのはシュニッツラーがヘッセの作品について短評を加えている部分である。

「『ペーター・カーメンツィント』を読む — ワンシーズンのヒット作。何故？」  
(1908年9月21日)<sup>1)</sup>

「午後シンクレアの『デーミアン』（面白い）を読み終える。」(1919年7月29日)<sup>2)</sup>  
(ここではヘッセが匿名で書いているためこの作品がヘッセのものであることをシュニッツラーはまだ知らない。)

「ヘッセの『荒野の狼』を読んだ。すぐれた特質が多く見られるがより高い意味において意味がなく、断片的である。」(1927年8月31日)<sup>3)</sup>

芸術家が芸術家を評した寸鉄人を刺す批評である。ここで見るかぎりヘッセをそれほど高く評価しているとは思えない。（『クリングゾア最後の夏』については何も述べていない。）シュニッツラーがヘッセについて述べているのは、少なくとも現在刊行されているものの中では、以上ですべてであるが、ヘッセがシュニッツラーについて述べているものは、少なくとも現在刊行されているものの中では、何も見当たらない。そこでヘッセの書簡集などの編集にも携わり、ヘッセの原稿を管理しているハイナー氏にこの件について尋ねたわけである。ハイナー氏の回答でもやはりヘッセがシュニッツラーについて述べたものについては知らないということであった。その理由として氏はヘッセが演劇とあまり縁がなかったことをあげた。今までのヘッセの全集には収められていなかったが、実はヘッセも戯曲を書いている。しかしそれらはほとんどが断片で習作の域を出ていない。

一方シュニッツラーは日本では小説家としての評価が高いように思われるが、ドイツ語圏ではまず初めは戯曲家として認められた。作品数でも戯曲のほうが多い。ヘッセはまず何よりも叙情詩人であり（この点ではハイナー氏と筆者の見解は完全

に一致した)、最期の時まで自作の詩を推敲していた。シュニッツラーも若い時には軽い感じの恋愛詩をかなり書いたが、よくあるようにそれで止めてしまった。戯曲にしても韻文で書いたものはごく初期の作品のみであとはすべて散文である。このような根本的な文学者としての資質の違いが、確かに二人をあまり近付けなかった理由であろう。その他シュニッツラーがウィーンという世界的な大都市に生まれ終生そこから離れることがなかった都会人であったのに対し、ヘッセはシュヴァルツヴァルトの生まれであり、バーゼルやベルンに住んだことがあるものの、大半は自ら好んで田舎に住んだという性向の違いもあるであろう。ただヘッセが同じウィーン生まれの作家ツヴァイクと交流があったことを考えると、やはり先にあげた理由のほうが大きいと思われる。また年齢差も一因かもしれない。(シュニッツラーは1862年、ヘッセは1877年、ツヴァイクは1881年生まれ。)

話はヘッセが原稿を書くのに使った便箋に移った。日本で出ているある旅行ガイドブックに、ヘッセがグリンデルヴァルトのHotel Belvedereの便箋を使い、『夢』という小説を書いたとあったのでその真偽のほどを質したところ、ハイナー氏は側にあったMilekの“Biography and Bibliography”で確かめて同名の作品がいくつあるのを確認した。「夢」は深層心理学に親しんだヘッセにとって身近なテーマであったことだろう。ハイナー氏自身はこの件について詳しくは御存知なかったが、ヘッセはホテルの宿泊費が充分高いと考えていたのでホテルの便箋を使うことはよくあったと話された。ホテル側にとっては、おかげで少ない出費で大きな宣伝になったわけである。

次いで、話は新しい「ヘッセ記念館」設立の動きに及んだ。札幌在住の浅田進氏が、千歳空港から車で20分ほどの所にある氏が所有する土地に「ヘッセ記念館」を建設したいという計画を立てていて、その依頼を受けたヘッセ友の会の新藤信氏がハイナー氏と二度話をしたというのでその件について伺った。

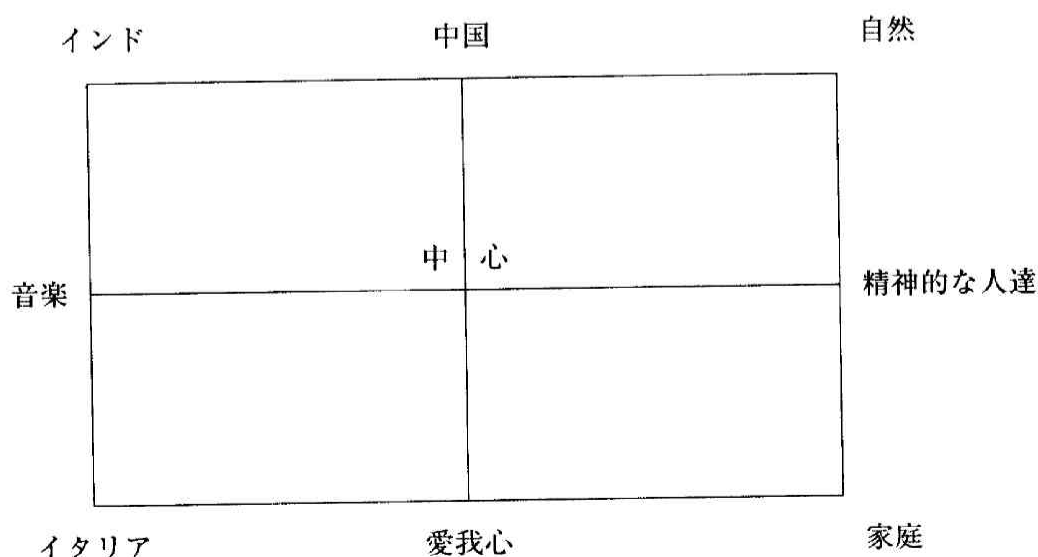
ハイナー氏は韓国で行なわれているヘッセ展を引き合いに出された。韓国からは主催者が二人の通訳を連れて氏のもとを訪れたとのことだが、その二人の言うことがときどき食い違い、片方は非常に強引で手を焼いたとおっしゃった。またこのヘッセ展が政治的に利用されているのではないかと憂慮されていた。新藤氏はハイナー氏の長年の友人で日本でもヘッセの水彩画展などを開催している。新藤氏は信頼できる人物なのでこの計画に協力したいとおっしゃった。だがハイナー氏の所有している遺品のほとんどは既存の記念館に寄贈されてしまったので、残っているのは三級品の絵とこれだけだよと言って、笑いながら手元にあった庭鍬を見せてくだ

さった。水彩画といえば、数年前ハイナー氏から直接譲り受けた水彩画を翌年二倍の値で売った人物がいたそうで、ヘッセ氏はこのように騰貴目的で買われることはもう二度としたくないとおっしゃった。

広島にヘッセと個人的に交流があった四反田五郎氏が個人で運営しているヘッセ記念館があるのでそれも新しくできる記念館に統合されるのかと尋ねると、「ヒロシマにあるということに特別な意味がある。原爆で亡くなった人の数は東京空襲で亡くなった人の数の比ではないが、人類が行なった愚考に対しての警告としての意味がある。統合は考えていない」という回答だった。その後いただいたクリスマスカードには四反田五郎氏が亡くなったという報せを御子息から受け取ったと書かれていた。広島のヘッセ記念館の存続が危ぶまれる。

ハイナー氏に会う数日前スイスのソロトゥルンで催されていた展覧会“Hermann Hesse : Aussenseiter oder Gobal Player?”を観たのでその話をした。ハイナー氏はこの時点ではまだこの展覧会を御覧ではなかったが、内容についてはよく御存知だった。問題になったのはDr. Eva Zimmermannが起草した次の図式である。（「愛我心」はEigensinnの訳。一般的には「我儘」、「強情」、「頑固」など否定的な意味で使われるが、ヘッセはこの語を積極的な意味で用いている。ヘッセ友の会副会長の田中裕氏はこの語に「愛我心」という訳語を当てられたが、ここではそれを借用した。）

この図は『ガラス玉遊戯』の説明として添えられたものだが、手書きで書かれているため、ヘッセの筆跡を知らない者には、あたかもヘッセ自身が、この図を書いたという印象を与える。しかも『ガラス玉遊戯』の説明としてもこの図は適切では



ないという結論に到った。ハイナー氏は「今回は若い者たちにまかせたのだが、若い者たちのすることはよく分からない」とぼやかれた。

ヘッセ全集の編集者フォルカー・ミヒェルス氏から校訂版ヘッセ全集が出るという話を聞いていたのでその件について伺うと、版元のズーアキャンプ社の社長ウンゼルトは大学教授か少なくとも博士号を持っている者を編集者にしているという話であった。ミヒェルス氏はズーアキャンプ社の原稿鑑査人で、全集や書簡集の編集をしている。肩書きこそないがヘッセ研究の第一人者であり、こと原稿については彼以上に通じている人はいないということは、少しでもヘッセに関心を持っている者なら誰でも知っていることである。権威付けのためにネーム・ヴァリューを求めるウンゼルトの態度に、ハイナー氏は「ウンゼルトが書いたことになっている本も実はフォルカーが書いたものだ。編集者はフォルカーでいい」と言って、憤慨されていた（ウンゼルト自身はヘッセに関する論文で博士号を取得している）。ミヒェルス氏の書斎と仕事ぶりは筆者も拝見したことがある。夫人が「世界一高価な壁」と笑っていらしたが、住居のどの壁も書籍でうめ尽くされ、天井の破れた書斎の机上には資料が堆く積まれているという、下手な大学教授など足元にも及ばない研究者ぶりであった。この後2001年3月から4回に分けて20巻の完全な全集がミヒェルス氏の編集で出版されることになり、現在までに8巻が刊行された。この中には初期の戯曲も入っており、研究者にとっては大変喜ばしいことである。

ここまで話しているとハイナー氏の息子のダーフィット氏が奥様と六歳のお嬢さんを連れてやってきた。フランクフルトから帰省しているとのことで、ブーメランの世界選手権で平塚に来たこともあるという。約束の一時間を疾うに過ぎていたのでそろそろお暇しようかと考えたが、まだいいとおっしゃるので話を続けた。

ハイナー氏が若い頃共産主義に共鳴していたところ、ヘッセが「人を殺す覚悟ができていなければならそれもいいだろう」と言ったという話を以前お聞きして、いつもは暴力を否定するヘッセが随分と過激なことを言うものだと思ったことがある。その話をすると氏は「あの頃（30年代）は若い世代は共産主義に染まるのが普通だった。ウィーンは別だが、口先だけで行動の伴わない者が多かったので、それを戒める意味で、もしも目の前に銀行家がいる場合、その人を殺すくらいの覚悟ができていなければならそれもいいだろう」と説明して下さった。ウィーンというのは1934年2月12日にカール・マルクス・ホーフで立ち上がった社会主義者達のことを言っているのである。ヘッセ自身も共産主義に共鳴していなかったかと尋ねると、「確かにそれはあった。だが実際の社会主義国家には失望していた」

との答えであった。ヘッセはブレヒトとも親しかったが、「それは彼の博識に驚嘆していたからだ。実際ブレヒトほどアジアのことに通暁している作家はいない」とおっしゃった。

「ヘッセは反民主主義者だった。私もそうだ」と興味深いことをおっしゃる。『ガラス玉遊戯』でもヘッセはエリート教育を標榜しているという批判があるので、真意を質すと、「実際スイスの政治を見てごらん。多数派はいつも自分の利益を優先しようとする。原発の推進だってそうだ。私が投票してきたのはいつも少数派だ。『ガラス玉遊戯』の中でもヘッセが唱えているのは精神的エリート、つまり政治的でも、利己主義的でもなく、つねに人類全体に貢献することを考えている人々を育てることなのだよ」と説明して下さった。

「いちばん大事なことはもう話したようだね」と言ってヘッセ氏は立ち上がり、庭で遊んでいる家族の所に行った。その間にトイレを拝借すると、反原発のポスターが貼ってあった。ヘッセ氏は相変わらず健在だ、そう思うと自然に笑みがこぼれてきた。そこへヘッセ氏が入ってきた。筆者が鍵を掛忘れたからであった。こちらも驚いたがヘッセ氏も驚いたようである。非礼を詫び暇を告げた。「機会があればまた来年お目にかかりたい」と申し上げると、「いつまで生きていられるか分からないし、生きていたくもない」と悲しいことをおっしゃる。二度の目の手術の結果が芳しくないからであろう。「そんなことをおっしゃらずに、世界中のヘッセ愛好家のためにも元気で長生きして下さい」とお願いして後ろ髪を引かれながらヘッセ氏のもとを去った。

#### 注

- 1) Arthur Schnitzler : Tagebuch 1903-1908. Hrsg. von der Kommission für literarische Gebrauchsformen der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Obmann : Werner Welzig. Wien 1991, S. 355.
- 2) Arthur Schnitzler : Tagebuch 1917-1919. Hrsg. von der Kommission für literarische Gebrauchsformen der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Obmann : Werner Welzig. Wien 1985, S. 276.
- 3) Arthur Schnitzler : Tagebuch 1927-1930. Hrsg. von der Kommission für literarische Gebrauchsformen der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Obmann : Werner Welzig. Wien 1997, S. 80f.

